

優秀修士論文概要

『鷹書』におけるアラブ世界の鷹狩り

—— *Kitāb al-Bayzarah* と *Kitāb al-Kāfi fī al-Bayzarah* の比較を中心に ——

飯 塚 七 海

はじめに

本研究で着目するタカやハヤブサなどの猛禽は、「生活のための猟」という枠を超えて世界各地で盛んに行われてきた歴史ある狩猟文化の一つ「鷹狩り」において重宝されていた。「鷹狩り」は、紀元前1000年頃の中央アジアに端を発し、そこからユーラシア大陸各地に広がった。中でもアラブ世界には中央アジアやペルシャから優れた鷹狩り技術や鷹匠が流入し、理解ある支配者のもとでさらなる発展を遂げ、その技術は『鷹書』として著された。こうしたアラブの鷹狩り技術はヨーロッパへ渡り、鳥類学の基礎にもなった。

こうした流れからもアラブ世界における鷹狩り文化の重要性は明らかである。しかし、猛禽は飼育馴らすことが難しく、また威厳や強さの象徴として一部の支配者層のみに好まれていたことから、多くの人間にとって身近な動物であったとは言い難い。そのためか、猛禽や鷹狩りに関する研究への関心は未だ低いままである。

アラブ世界における鷹狩り研究は、1900年代のフランスにおいて François Viré を中心に『鷹書』のフランス語翻訳化などを通して概説的な基礎が築かれた。また、2000年代以降では、詩などの文学面から動物に焦点を当てた堀内勝 (2008) や鷹書なども含めたフルースィーヤの史料の分類をした Shihab al-Sarraf (2004)、マムルーク朝期の獣医学を中心にまとめた Housni al-Khateeb Shehada (2013) などの研究が挙げられる。しかし、これらの先行研究は、『鷹書』自体の内容に注目したものではなかった。

そこで本稿では、*Kitāb al-Bayzarah* と *Kitāb al-Kāfi fī al-Bayzarah* という時代も地域も異なる二つの鷹書に記されている猛禽の飼育法や訓練法の具体的な内容を比較し、どちらにも通ずる共通点を明らかにすることで、中世アラブ世界において行われていた「鷹狩り文化の全体像」と「人間と猛禽の関わり」のより明瞭な実態に迫った。

第1章 『鷹書』の変化から辿るアラブの狩猟文化の変化の考察

第1章では、アラブ世界において書かれてきた様々な鷹書のタイトルや内容の時代ごとに異なる特徴から、アラブ世界における「鷹狩り文化」の位置づけの変化や「狩猟文化」全体の大きな流れについて考察した。

8～9世紀では、アッバース朝の宮廷文化として「鷹狩り」が嗜まれるようになったため、王侯貴族向けに鷹狩りや猛禽に特化した『鷹書』が著され始めた。この時「鷹狩り」は、他の狩猟とは一線を画す独立した分野であった。しかし、10世紀に入ると鷹狩りに付随するような形で、イヌやチーターなど他の動物を使った狩りについても書かれる「鷹書における狩りの総合化」が起こり、「鷹狩り」と他の

狩猟との線引きが曖昧になり始めた。また、猛禽や鷹狩りの知識を蓄える教本的な性格から詩などを多く引用する「鷹書の文学化」も起こり、上流階級の娯楽としての性格が強まっていった。11世紀には非アラブ系勢力の台頭によりアッバース朝が弱体化して鷹書空白の時代が訪れるも、アッバース朝が力を取り戻すと再び狩りが嗜まれ、鷹書も編纂されるようになった。

12～13世紀には、鷹書の中に騎馬術などの軍事教練的要素が加わってくる「フルースィーヤ化」や「鷹書における狩りの総合化」が進み、鷹狩り以外の狩猟が多く占めるようになる「鷹書の狩猟専門書化」が起こる一方で、鷹匠向けのマニュアルとして8～9世紀頃のような鷹狩りに特化した鷹書も書かれるなど、様々な性格を持つ鷹書が著された。特に13世紀では西欧やモンゴルといった全く異なる文化を持つ外部との接触により、それぞれの固有の鷹狩り文化が相互的に影響しあった。そして14世紀には、フルースィーヤ化や狩猟の総合化が進んだ結果として、鷹狩り含む狩猟文化全般がフルースィーヤの中に完全に組み込まれるという「フルースィーヤへの内包化」へ至ったのである。

このことから、鷹狩り文化は時代が下るにつれ、徐々に「狩猟」というジャンルの一部に溶け込み、さらにその狩猟文化には軍事教練的な要素も付加され、フルースィーヤにも組み込まれていったと考えられるだろう。

第2章 *K. al-Bayzarah* と *K. al-Kāfī fī al-Bayzarah* について

第2章では、本稿で扱う二つの鷹書、*K. al-Bayzarah* と *K. al-Kāfī fī al-Bayzarah* を比較していくにあたって、それぞれの特徴や傾向の違いについて扱った。

10世紀のファーティマ朝期に書かれた *K. al-Bayzarah* は、王や貴族などの上流階級向けに教養・娯楽としての鷹狩りの知識を提供する書物であり、且つ、カリフに仕えた鷹匠としての著者自身の体験記という性格を持っていた。一方、13世紀頃のシリア・イラクで活躍した鷹匠によって書かれた *K. al-Kāfī fī al-Bayzarah* は、猛禽を正しく安全に扱うための鷹匠向けマニュアルという性格が強かった。書かれた時代も地域も異なるだけでなく、鷹書の性格も大きく異なるこの二つの史料だが、その中で共通性があれば、それは中世アラブ世界の鷹狩りにおいて普遍的な事物だと言い切れるだろう。実際どちらの史料にも、猛禽の世話や狩りの様子だけでなく、病気や怪我の治療についても多く記述があったことから、当時は猛禽を扱う際には世話や訓練だけでなく、それらと同様に猛禽に特化した獣医学的知識も重要視されていたことがうかがえた。

また、二つの史料で扱われていた狩猟用猛禽について、*K. al-Kāfī fī al-Bayzarah* ではオオタカ、ペレグリン、セイカーが主要な鳥として挙げられていたが、*K. al-Bayzarah* ではオオタカ、セイカーの記述は同様に多いものの、ペレグリンの記述の割合が少なく、代わりにハイタカが重要視されていたこともうかがえた。

第3章 *K. al-Bayzarah* と *K. al-Kāfī fī al-Bayzarah* の比較

第3章では、猛禽の種類ごとの飼育・調教法や狩りの獲物について、また鷹匠と猛禽の関係性について、二つの鷹書の対比を行った。

飼育・調教法については、タカ系猛禽もハヤブサ系猛禽もほぼ共通していたことから、「目の縫合、詰み、据え、呼び戻し」といった調教の流れは一般的なものであったことがうかがえた。また、獲物についても、オオタカやペレグリンは鳥類全般を主な獲物とし、セイカーはガゼルを中心とした哺乳類へ

の狩りが大半であったということがどちらの史料でも共通して描かれていた。

しかし、飼育・調教法については、*K. al-Bayzarah* では *K. al-Kāfi fi al-Bayzarah* に描かれていたような、ハヤブサ系猛禽に被せる頭巾への慣らしに関する記述や、雛の飼育法に関する記述がみられなかった。また、獲物についても、*K. al-Bayzarah* ではサギの狩りやヤギ・ヒツジの狩りなど、*K. al-Kāfi fi al-Bayzarah* には無い描写がみられるなどの違いがあった。

人と猛禽の関係性に関しては、*K. al-Bayzarah* では、著者の実体験として、名前をつけられた猛禽とのお話が多くみられ、著者が一羽一羽と向き合っていたことが読み取れた。一方、*K. al-Kāfi fi al-Bayzarah* では、猛禽に対して一定の知性や感情を認め、親近性を感じているとともに、「動物愛護」の観念に通ずるような猛禽を守ろうとする考えが見て取れた。こうしたことから、中世アラブ世界において、人にとって猛禽は、「狩りの道具」ではなく、互いに愛情や信頼を抱ける、かけがえのない「相棒」という存在であったと言えるだろう。

おわりに

拙稿(2019)では、*K. al-Kāfi fi al-Bayzarah* 一冊のみから中世アラブ世界の鷹狩り文化の実態に迫ったが、本稿では *K. al-Kāfi fi al-Bayzarah* と全く性質の異なる *K. al-Bayzarah* を加えることによって、その共通性から中世アラブ世界の鷹狩り文化の様相について更なる明確化を試みた。その結果、本稿で明らかにしたような事柄がアラブ世界の鷹狩り文化全体を通して言えることであるとわかったが、その時代や地域における鷹狩りの特徴に関しては、史料の不足から断定することができず、まだ研究の余地がある。また、本稿は人ではなく「猛禽」という動物に焦点を当て、鷹狩り文化について研究を進めたが、「鷹匠」という職の実態など人に焦点を当てた鷹狩りの研究もまだ浅いと言わざるを得ない。

「猛禽」は紛れもなくアラブの人々の歴史に深く関わっている動物であるが、人の歴史に深く関わっている動物は彼らだけではない。人々の生活に直結する家畜たちは勿論、野生の動物たちも、現代のように科学技術の進んでいなかった時代においては今よりも身近な存在として人とともに生きていた。技術革新により大抵の事は人間と機械だけで済ませられるようになり、人間と動物の共存の機会や動物たちの居場所を奪って人間のためだけの居住地を広げたことで、動物との関わりが急速に希薄になっている。そうした現代において、動物との歴史を明らかにすることで、動物を身近に感じ、また彼らとの新しい共生のかたちを考える一助となれば幸いに思う。

補論 現代に残る鷹狩り文化— UAE での体験記より—

補論では、現在のアラブ世界の鷹狩りについて、鷹狩り先進国である UAE に焦点を置き、鷹狩りがアラブの伝統文化としてのイメージ獲得するに至った背景や、取り組みについて扱った。

UAE では、初代大統領の Zāyid b. Sulṭān Āl Nuḥayyān の時代に鷹狩りやハヤブサに対する親近感や「伝統文化」としてのイメージが強化され、「富裕層の娯楽」として人気が高まった。しかし、それが原因で起こったフサエリショウノガンの絶滅危機を契機に、UAE の鷹狩りは「一般市民の娯楽」としての「猛禽による競技」へと大きな変化を遂げ、一般市民にも猛禽や鷹狩りが一層親しまれるようになった。現在では、ハヤブサのためのパスポートや専門病院などハヤブサを重視する取り組みが多くなされ、鷹狩り大国として世界から注目を集めている。

こうした UAE におけるハヤブサとの共生のかたちは、動物への親近感が希薄になってしまった我々

にとって、動物との新しい共生を再考するうえで良い例となるだろう。

〈文献リスト〉

- ・飯塚七海, 2019, 「中世アラブ世界における鷹狩り—『鷹狩全書 (Kitāb al-Kāfi fī al-Bayzarah)』 第三章を中心に—」, 『史観』 第182冊 : 43-62.
- ・堀内勝 (鷹書研究会), 2008, 『鷹の書—諏訪藩に残る『鷹書 (大)』の翻訳と注解—』, 東京 : 文化出版.
- ・Al-Sarraf, Shihab, 2004, "Mamluk Furūsiyah Literature and Its Antecedents", *Mamlūk Studies Review* Vol.8 no.1, Chicago: The Middle East Documentation Center, 141-200.
- ・Shehada, Housni Alkhatib, 2012, *Mamluks and Animals: Veterinary Medicine in Medieval Islam*, Leiden: Brill.